
原子番号173

克己 残心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原子番号173

【Nコード】

N9326W

【作者名】

克己 残心

【あらすじ】

とある湾岸都市、久宇慈市。その街の機動隊に務める、剣道が取り柄の青年の名は今村大希。タイムトラベルだとか、巨大ロボットだとか、子供じみた夢のある話が今でも好きな彼は、とある深夜にタイムトラベルについて組まれた特番を見る。結局その出来栄えは大希を落胆させたが、その夜から世界は動き始めていた……

剣に生きる、正義感に溢れた青年の名は今村大希。優しく、気遣いもできるがどこかに影を持った青年の名は来栖未成。この二人の

周りで流れていく、不思議な2012年。

Beyond all Space and Time . 全ての
時空を越え、繋がっていく。

Prologue

人は進化を渴望する。その根源的な欲望はどんな存在よりも強い。地球の四十億の歴史の中、たった数百万年という間に人間は凄まじい変遷を遂げてきた。手に武器を持ち、火を手に入れ、言葉を生み出し、ついに人は爆発的な成長を遂げ始めた。農業革命、都市革命、そして産業革命。人は進化を、成長を続けた。それを経てもなお、人はその欲望を収めるところを知らなかった。それが結果的に原子爆弾の悲劇を生み出そうとも、人はそれでもその進化の欲望に従って、この世の理を求め続けたのだ。

もし、人が少しでも進化の欲望を抑え、知性の成長を待とうと努めたならば、こんな出来事は起きなかったのかもしれない。

1st Period 深夜の出来事

時計の針が、暗闇の中で一時を指していた。狭苦しい六畳間の中、一人の青年がテレビをじつと見つめていた。鷹のように、丸い中にも鋭さのある目が、青や赤、緑と様々な光を反射している。隣の寝室では相部屋の友人がいびきをかいているというのに、よくもまあ集中を切らさず見つめ続けられるものだ。おそらく、青年が一つの憧れを持ってこの番組を見つめていたからなのだろう。

青年の前のテレビの中では、暖色が目立つポップでちやちなデザインのスタジオのもと、科学者達の舌戦が繰り広げられていた。片や白い髭を生やし、白衣を身にまとったいかにも科学者という外見をした三人。しかし、人は外見では判断できないものだ。白衣を着ている事が、素晴らしい科学者であることの理由にはならないのだ。眉にしわを寄せた青年は、その事をはつきりと理解させられているところだった。黒いスーツを身にまとい、画一的に髪を整えた三人、科学者というよりは、むしろ銀行マンに見えるその三人が、形から入っている博士達を次々に論破していたのだ。

『時空間が歪んだワームホールを通る事により、未来にも瞬時に飛ぶことが出来れば、過去にだって遡ることが出来るのです。そして、負のエネルギーを持つ物質が存在すると同時に、またワームホールの存在も実証されているのです』

瓶底メガネまでかけた、一昔前のアニメにいなイメージをこれでもかと体現した白衣の男性がそう口にする。隣のボサボサ白髪頭の老人も強く頷いてみせた。このボサボサ頭の老人は、既に『宇宙ひも』と呼ばれる存在を利用したタイムマシンの存在を否定されていたのだ。『宇宙の端など行けるか』と。まさしく、ワームホール論はこのオールドタイプ三人衆が抱く最後の希望だったのだ。しかしこれもまた、スーツを着て、テレビ越しにもわかるほど髪をワックスで塗り固めた男に、いとも簡単に打ち砕かれてしまうのだった。

た。

『あなたが仰りたい負のエネルギーとは、反物質のことでしょうね。確かに、1995年に反水素が生み出され、その存在は実証されました。しかし、現在もお反水素は、ようやく0.2秒その姿を保ったに過ぎません。そんな不安定な物質を、一体あなた達はどれほど用いるつもりでいるのですか』

白衣の老人たちはうなだれ、黙りこんでしまった。コストパフォーマンスを話題にするなどとか、まだ戦おうと思えば戦えたのだろうが、それはしよせん裸の王将がちょこまか逃げ回るようなものだ。これ以上自分達が傷つくのを恐れた三人は、ついに無抵抗を決め込んだのだった。

そうして出来上がった空虚な時間を突き、髭を真つ直ぐ切りそろえたスーツの男が立ち上がる。いきなりスタジオの真ん中に躍り出ると、手を叩いて乾いた音をさせながら、男は歯を見せて愛想よく笑う。『過去に遡る』という、数多の創作に反映されてきた人類の夢をこれでもかと否定したのだ。多少イメージを気にしているのだろう。テレビを見つめている青年は思った。

『皆さん。確かに、過去への時間旅行は人類の果てなき夢かもしれませんが。ですが、まあよく考えてもみて下さい。未来から来たという人間が、一人も見つかっていないというのは甚だおかしい話ではありませんか。それこそ、時間旅行が出来ないということの証拠なのです。ですが、これから人も人はおそらく過去の世界へ飛ぶことを渴望するでしょう。それがいつか過去への旅を実現しないとは……言い切れません』

研究者が言い終わらぬうちに、青年は口をとがらせ、いかにも不満そうな様子でテレビを消してしまった。リモコンをちゃぶ台の上に放り上げ、部屋中に染み渡るため息をつきもした。蓋を開けてみるまで、この青年、今村大希いまむら たいきはこの番組をずっと心待ちにしていたのだ。二十三にもなる大希だったが、心は少年、『タイムトラベル』だとか、『巨大ロボット』だとか、そういうものにずっと憧れを抱

いていた。

ところがどうだ。蓋を開けてみれば、甲斐もなくこてんぱんに言い込められる情けない研究者しか出演していなかったのだ。夢物語であるにせよ、もう少しまともな理論を背負って戦ってくれると思っていたのに、某ネット大辞典で出てくるような知識しか、あのパソコン研究者は提示できなかったのだ。失望した大希は一気に夜更かした疲れに襲われて、再び暗闇の中でため息をついた。

「ふざけんな、あのボケ老人ども……あんなんじゃ柳田何とかにも完敗だつづの」

機動隊勤務の身に夜更かしはあまり好ましくない。それでも楽しみに起きていたというのに、やはり深夜番組のクオリティでしかなかったのだ。テレビをもう一度だけ見て鼻で笑うと、大希は友人を起こさないよう、抜き足差し足で隣の寝室に身を滑り込ませる。大希の苦悶も知らず、友人の空井健そらい たけるは酒の匂いを漂わせながら楽しそうに眠りこけていた。大希はその寝顔を羨ましい目で見つめる。

「俺もあのテレビ見て、戦国時代にでも行った夢を見て寝たいとか思ってたのにさ……」

そう独り言を呟くと、今日は何の夢も見ないと決めて薄い布団に倒れこんだ。

時をほぼ同じくして、ここは久宇慈市くうじしのとある住宅街。もうすぐ草木も眠る丑三つ時という時に、一人の男があてどもなく街をさまよっていた。その目は虚ろで、着ている服はすり切れ、足も引きずるようにして、とにかくまともな生活を送っている人間のようには見えなかった。そんな男がこんなところで何をしているのか、誰が見ても皆目窺い知ることができないだろう。ただ歩いているだけ、これぞ本物の『さまようこと』としか言いようがない。通りに人っ気はなく、大小様々な羽虫だけが、次の瞬間に起きる出来事に備えて街灯に集まっていた。

十分して、ついに丑三つ時がやってきた。草木が眠り、家の軒が

三寸下り、魑魅魍魎ちみもつりょうが跋扈はつこする丑三つ時がやってきたのだ。それでもなお、男は時折止まったり、時折動き出したり、その不審な雰囲気を一ミリたりと変えようとしない。本当に、ただただ歩いているらしい。だがそこへ、魔が静かに忍び寄ってくる。ナイフを街灯のもとに光らせ、電柱の陰に隠れながら、その浮浪者を窺っている男が一人。この男が、どんな思いで浮浪者にそうするのはわからない。だが、ナイフを持っているのだから、することは一つに決まっている。

浮浪者が立ち止まった瞬間、ついに男は走りだした。高らかに足音をさせながら、ナイフをしっかりと構える。しかし、浮浪者はまるで無頓着、この世で何が起きようが関係ないというように、振り向いたりする素振りには全く見せなかった。

「死ね」

悲鳴は上げなかった。ただその身をぶるつと震わせ、さして苦しむ様子もなく、浮浪者はすぐにぐったりと動かなくなった。手に伝わる浮浪者の全体重を感じると、男はすぐさま浮浪者からナイフを抜き去った。そして、自分が殺した相手をこれ以上一瞥することもなく、血だまりを飛び越え男はその場を走り去っていった。

白く照らされた寂しい夜道の中で起きた、たった一分の出来事。それを見ていたのは物言わぬ羽虫だけ。血に塗れた無残な死体が見つかるのは、明日の五時まで待つこととなるのだった。

2nd Period 稽古後の出来事

大希は込み上げてきた諦めにも似た思いを排する。それから竹刀を握り直し、大希は再び柳剣人^{やなぎ けん}と向かい合った。

高校時代は共にしのぎを削り合い、そして共に玉竜旗を目指した間柄の二人。本来なら剣質の違いこそあれど、そこに実力の違いは無いはずであった。ところが今日はどうしたのか。先程も剣人の攻めに小手を引き出され、剣先が中途半端に上がった間抜けなところに重たい面打ちを叩き込まれてしまったのだ。親友に子供扱いされつつある自分が悔しかったが、まぶたが重たいこの状態では勝ちようがなかった。

それでも、やるからにはやらなければ剣人に呆れられてしまう。それだけは大希のプライドが許さなかった。じりじりと数センチ刻みですり寄り、そこから気合いととも面に飛ぶ。しかし剣人は動じない。すげなくその剣先を払って、そのまま逆に面を放った。大希は首を捻って何とかかわす。剣人の体当たりを食らってよろめいたところを、彼はさらに間合いを詰めてくる。とつさに竹刀を頭上に掲げて剣人の一撃を防ぎ、そのまま突っ込んできた彼とぶつかり合った。そのままつばぜり合いに持ち込み、大希は腰に力を入れて剣人に圧力をかける。つばぜり合いには強い自信があったから、簡単には分かれられないよう必死に食い下がった。剣人の方はさつさと分かれてしまいたかったのだが、適当に逃げては大希の引き面の餌食になるから、やはり中々分かれることができない。

だが、徐々に空気の流れが変わり始める。大希が軽質で高めの気合を上げると、剣人が応えて重みのある気合を発した。どちらの油断もないことを確認した二人は、ようやくじつくりと間合いを置き始めた。示し合わせ、二人は同時に足を背後にすらせていく。その間にも、出し抜かれられないように油断は怠らない。お互い血眼で睨み合いながら、剣先が触れるか触れないかの間合いまで離れた。

その刹那、大希はいきなりその場で腰を入れながら踏み込む。剣人は思わず身構えてしまった。それを見逃さなかった大希は、そのままさらに剣人の間合いへとわずかに踏み込んだ。感度が高くなりすぎていた剣人は、思わず面を引き出されてしまった。そこを見逃さなかった大希は、機先を制して飛び出す。

「小手エ！」

キレのある出小手が、剣人の右小手を確かに捉えた。大希の鋭い気合いと竹刀の鋭い打突の音が、格技室の一带に凜と響く。残心も備わった、文句なしの一本だった。この出小手こそ、大希が恐れられてきた理由なのだ。いくら眠かろうが、一心に磨いてきた最高の一撃だけは鈍るはずもない。剣人は悔しそうに顔をしかめていた。直後に地稽古の終わりを告げる太鼓が鳴り響く。大希は安堵し、そして本日の不甲斐なさを思ってたため息をついた。

「今日はダメダメだ。ぜんぜん齒ごたえがなかったな。どうしたんだよ」

練習も終わって解放されるやいなや、剣人が手拭いで汗を拭きつつ大希のところまでやってきた。その鋭い目はいかにもつまらなそうに細められていて、先ほどの稽古に不満を持っているのがありありと見て取れた。あれだけ動けただけでも満足だ、と言いたいのをこらえて、大希は苦笑いしてみせる。

「いやあ、昨日夜更かししちゃってさ」

「夜更かしい？　なんだ。今でも健康優良児のお前にしたら珍しいな。彼女でもできたか？」

剣人のからかうような口調に、大希は顔をしかめた。一年前に昔の彼女と別れて以来、とんと浮名は流せていなかった。一方の剣人はもうすぐ結婚という所までこぎつけているのだから、明らかな当てこすりというほかになかった。

「彼女と眠れぬ一夜を過ごしたって？　そうだったら良かったよな。深夜の特番に期待して、バ力を見ただけだよ」

「そんな面白い番組あったか？」

すぐさま大希は首を振る。今日の深夜まではあると信じていたが、今はもう、あんな番組を楽しみにしていた自分が恥ずかしかった。

「いいや。無かったね」

剣人が大希の言い返しに首を傾げていると、二人の背後から健がやってきた。二人のやり取りをちやっかり聞いていた健は、その子供っぽさが残る顔にやたらとにやにやとした笑みを浮かべていて、忍び足で大希のそばに忍び寄り、出し抜けにその肩を叩いた。

「何言ってるんだよ。『ガチンコSF生討論会』を見るにあたって、お前は昨日の夜からタイムトラベルについて復習してたじゃないか」大希は気まずそうに顔をしかめる。剣人は呆れたように顔をしかめる。

「何だよその安っぽい番組。ハズレに決まってるだろ……お前がいまだに特撮とか大好きなの知ってるけど、それくらいの見境は付けるよ。だから彼女できないんだぞ」

「関係ないだろ！……その話はもうやめだ！」

大希が腕ですっぱりと空を切り、他愛のない無駄話を封じ込めてしまった。まだまだつつきがある話題だっただけに不満が残った剣人と健だったが、こうなってはもう口を裂いても言葉は引き出せない。二人は肩をすくめあい、せーので諦めた。すると話すこともなくなるので、自然に三人は着替えに赴く。その途中で、突然健が思い出したように口を開いた。

「あ。ゆうべといたら、通り魔が出たんだよなあ。朝から刑事部の奴らは大変だったよな」

健がうんざりしたような口調で呟くと、大希も眉にしわを寄せながら頷いた。自分ぐだらない番組にいらいらしながら眠りにつこうとしている影で、一人の浮浪者が殺されているのだ。世界というのはどこで何が起きているかわからない。剣人もため息をついて、指を折りながら人づての情報を数え上げ始める。

「死因は背後から心臓を一突きされたことによるショック死。死亡

推定時刻は午前二時から三時頃。目撃者はゼロ。聞いたのは大体これくらいだ」

袴の帯を解きながら健は唸った。体が資本を地で行くような奴だったが、それでも警察の端くれ、考えることは考えるのだ。

「目撃者がいないって、相当難しい事件になりそうだな。それに、わざわざ丑三つ時を選ぶなんて気味が悪いぜ。通り魔つつても、かなり計画を練ってるんじゃないか」

袴の下から器用にトランクスを履き直しつつ、剣人は健の言葉に頷く。彼は将来刑事になる目標を持ってこの世界に飛び込んだから、犯罪に関しての知識は隣の二人よりも持っているつもりだった。

「そもそも通り魔自体が難しい事件だからな。現行犯逮捕ならともかく、こういう風に人目につかない時間を選ばれたりすると、下手をすれば完全犯罪だってあり得る。殺された奴の身元自体もわからないんじゃないか、余計に」

二人の言葉にももちろん耳は傾けていたが、大希は別のことを考えていた。考えてみると引つかかるのだ。簡単に骨格図を描いてみると、やはり一つの壁にぶつかった。大希は道着の紐を解きながら唸る。

「おかしくない？ 背後から心臓を一突きって、適当に刺したら背骨で逸れるだろ」

「あ。そういえばそうだな……」

剣人は大希の言葉に納得した。心臓を一突き、というのは存外に難しい。正面から刺しても、肋骨で逸れて上手く刺せないときが多いのだ。それが背後となれば大変だ。そもそもかなり刃渡りのある刃物を使わなければならないし、今しがた大希の言った通り、胸骨ならいざしらず、背骨を一刀のもとに貫く刃物はそうそうない。餅割り程度に日本刀を扱ったことのある三人は、その切れ味もおぼろげに覚えていたが、やはり正面きって心臓を突き破るのは至難に思えた。シャツの袖に腕を通し、健はその人差し指を立てた。

「合理的に考えようぜ。肋骨を避けて突き刺したって考えるのが普

通だろ」

「お前から合理的という言葉が聞ける日が来るとは思わなかった」
剣人がやりとしながら言うのと、むっとした健が剣人の肩を叩いた。

「なんだよ。俺だってバカじゃないんだよ」

「バカだろ。警察学校でも、いつも赤線をくぐり抜け続けてきたような男のくせに、何言ってるんだ」

「それを言うな！」

健は歯噛みしたが、ため息混じりに大希はその二人の動きを制する。かたや熱血だけれど落ちこぼれ寸前、かたや冷静でもって秀才自然とぶつかり合う機会が多くなり、そして中庸の大希が潤滑油となる機会も多くなる。大希はいつも神経をすり減らす損な役回りだった。

「やめろよ面倒くさい。もっと建設的に話をしよう。肋骨を避けて突き刺したってことは、それなりに腕がある人間だってことでしょ」

「あ、ああ。そうだな……」

健は唇を噛みながら頷いた。事実、それが分かれば犯人の絞り込みもしやすい。ナイフの手練など、久宇慈市という平和な街にそうそういるものではない。彼はあごをさする。

「剣のプロなら居合や剣道の有段者を探ればいいけど……ナイフって実力を測れないからな イテッ！」

剣人は眉にしわを寄せ、健の額を指で弾く。握力の強い剣人は弾指の威力も強い。健は返せる言葉も返せず、ただただ額を赤くしてうつむいた。三人の中で一番小柄な健は、そのまま百九十に迫る長身の剣人に見下ろされる形となってしまった。

「だからバカなんだって。そんな表面的なもので実力が図れるわけ無いだろ。無計画に殴りに行ったんならともかく、わざわざ簡単に足がつくような方法で人殺しなんかしないさ」

健は顔をしかめて睨んだが、今回の『バカ』呼ばわりはさすがに言い返せなかった。

「くっそお……」

大希はこれ以上介入せず、もうなるがままに任せておくことにした。そう決めてみると、二人の滑稽なやり取りはとても楽しく映るのだ。うつすらと笑みを浮かべて二人の姿を見つめていると、いきなり一人の男が更衣室に現れた。

「すいません。ここに今村大希さんはいらっしゃいますか？」

大希はすぐに手を挙げた。

「はい。僕ですが、どうかしましたか」

「いえ、刑事部の方から、今村さんが参考人として召喚されているんですよ」

「え？」「はあ？」「お？」

三人が一樣に似たり寄ったりな反応で振り返り、磁石で引かれるかのようにするすると新米の雰囲気を全身に湛えた青年の方に寄っていく。その他もチラチラとその三人と一人の様子を窺い始めた。久宇慈高校黄金世代の三人に取り囲まれては青年も縮こまるしかなく、居心地悪そうに手いじりしながら小声で続きを口にした。

「えっと、ですから、すぐに署の方へ来て欲しいそうです」

健はつばを飲み込むと、とにかく訝しがる様子の大希の肩をつついた。

「おい。お前何かしたのかよ。あ！お前さては……」

「バカか。俺は大酒のんだお前の隣で寝たっつの」

大希が口を尖らせると、健はそうだよな、と呟き肩をつつく指を引っ込めた。剣人は宙を睨んでうむと唸り、そのまま大希に問いかけた。

「最近財布落とさなかったか。お前の持ち物が被害者から見つかったのかもしれないぞ」

重要参考人として呼ばれたわけではないし、通り魔に少しも関わりない大希が呼ばれる理由としたら、近くで大希の持ち物が見つかることぐらいだろう。だが、大希はそれもなかったのだ。

「ないよ。警察が交番のお世話になるって、カッコ悪いだろ」

「それは俺に対する当てつけか。なあ」

最近まさに財布を落として交番のお世話になった健が迫ってきたが、大希はすげなく払って新米の脇をすり抜けた。

「もついいよ。……このあと体力トレーニングがあるけど、まあ、署へ出頭なら許してくれるだろ。ご足労ありがとう。行くぞ」

「はい！」

新米は勢い良く頷き、大希の後をついて歩き出した。

その頃、刑事部の方では、一人の青年がやたらと落ち着かない様子で待ち構えていた。

「大希……早く来いよお……」

3rd Period 病院での出来事

町の中心よりわずかに外れたところに建つ、展望台付きの白い鉄塔。これだけでは単に東京タワーを縮小し、そして純白に塗っただけの独自色の欠片も無い街のシンボルに見える。だが、このタワーには凄まじい計算性があるのだ。まず、このタワーには最新式の原子時計が積まれ、常に正確な時を刻んでいた。それだけでも物珍しいが、なんとこのタワーそのものがカルジオイド式の日時計となっているのだ。証拠が街の至るところにあるモニュメントが様々な趣向を凝らした形で文字盤の役割を果たしており、元日に正確な日時計として作用するというスポットである。ベッドタウンで高い建物が少ないからこそできる芸当、爆発的な人気は無いが、息の長い観光名所となっている。

話が逸れた。だが、話だけの価値はあると思う。また逸れた。今度こそ戻ろう。とにかく、そんなタワーのすぐそばに、久宇慈の警察署はあるのだ。

「未成^{みなり}！ わざわざ出迎えに来てくれるなんて、苦労かけたな」

車から降り、大希は玄関先で待ち構えていた青年に駆け寄った。

青年の名は来栖^{くるす}未成^{みなり}という。変わった名前だが、『達成したと満足せずに、いつまでも向上心を持つように』と名付けられた、れっきとした由来のある名前なのだ。『身なり』と聞き間違えた大希に、未成はいつだかそう言った。

「すぐ来てくれてよかったよ。タクシーを呼んでるから、すぐ大学病院に行くよ」

鑑識として働いている未成が大学病院へ行く理由は一つくらいしか思いつかなかった。だからこそ疑問になり、大希は小さく首を傾げた。

「ホトケさんに会いに行くのか？ どうして機動隊の俺が必要なんだよ。参考人として引っぱり出してまでさ」

未成はしっかりと頷く。彼にとってしてみれば、彼がいなくては話が始まらないとさえ思っていた。重要参考人として呼んでもいいくらいだと。

「必要だから呼んだんでしょ。理由は追々話すから、まずはタクシーに乗って。ほら来たよ」

未成の細くしなやかな指が、遠くから走ってくるてっぺんに丸い時計のオブジェを付けた白いタクシーを捉えた。大希は自分の乗ってきた中古の軽自動車と見比べながら、ぼそつと呟く。

「俺、車あるの知ってるだろ？ どうしてわざわざ……」

未成は猫のように人懐っこい笑みを浮かべ、大希の方に振り返った。

「もちろん、君とゆっくり話したいからさ」

言葉自体は何でもなかったが、大希は気がついた。その頬が少し引きつっていることに。元々性格の優しい未成のこと、遺体を見に行くことに少々は緊張するのだろうと気にしないことに決めた。タクシーの自動ドアが開き、大希は素早くその空間に体を滑り込ませる。未成はその後にゆったりとつき従う。タクシーの運転手の質問に、未成は控えめの声で答える。

「大学病院までお願いします」

「了解しました」

サイドブレーキが引かれ、タクシーは滑るように走りだす。最近の車は随分騒音も少なく、確かに話を交わすにはもってこいかもしれなかった。大希は背もたれに全体重を預け、横目で未成の顔を窺う。彼はアイドルのように優しい顔立ちの男で、警察というと驚かれ、鑑識というとし少し落ち着かれる、そんな外見をしていた。一年前にふらりと転勤してきて以来、二人は趣味も合って意気投合し、親友の関係を築いていた。

「未成、もう一度聞くけど、どうして俺が必要なんだ？」

未成はため息をついた。一瞬こちらを見るのだが、すぐに目を伏せてしまう。いかにも不審な様子だった。

「なあ大希、変な話するけど、『クローン人間』って信じるかい？」
大希はぼかんと口を開け放した。彼が信じるわけがなかった。まあ確かに、可能な技術ではある。だが、人々は認めないだろう。大希にしても、いつだかにそんな設定のあるゲームをやったくらいにしかその存在を頭にとどめていなかった。

「信じるわけ無いだろ。できたって、しちゃいけないことはたくさんあるぜ。クローン人間はその一つじゃないか」

未成は曖昧に頷いた。信じたいが、決定的な理由のせいで、それを信じるのが未成にはできなくなってしまっていたのだ。

「まあね。普通ならそう言うよ。僕だって昨日まではそう思ってた。でもさ……技術的には可能だし、もしかしたら、なんだよ……」

大希は表情を歪ませた。未成は知性に溢れた青年であつたし、彼が決してふざけているわけではないこともその深刻な表情からも読み取れる。だからなおさら、大希は今の言葉が全くちぐはぐなものに思えてしまった。未成の表情から目を外し、大希は外の並木に目を向ける。

「未成らしくないな。そんなこと、あつたらたまらないじゃないか」
一向に自分の言葉に耳を貸そうとしない大希。未成はそろそろ焦りだした。声を殺し、彼は大希に耳打ちをした。

「でも、事実あるんだよ！ 今日の深夜に殺された浮浪者の顔が、大希にそっくりだったんだ！」

「な、なんだって？」

身を捻って、大希はモノトーンの無機質な車内に目を戻した。自分に似た人間が殺されたのはあまりいい気がしないし、今までで一番の衝撃だった。だが、待てよと冷静になる。いくらなんでも、ただ似ているだけでクローンとするのは暴論だ。

「いやいや、いや。他人の空似だろ？ バカなこと言うなよ」

「本当は写真があるんだけどさ、見せたって大希は同じ事言うんで

しょ？」

「ああ。」大希はすぐさま頷いた。「世の中には自分と同じ顔の人間が三人いるっていうだろ。そしてその三人に会ったら人生アウトだつてね」

未成はため息をついた。ここまで自信を持って言われてしまうと、こちらもそうなのだろうと思えてくるから困ってしまう。だが、やはり未成には単なる他人の空似とは思えなかったのだ。

「だから見に行くんでしょ。見たら、何か思い出すことだつてあるかもしれないし、何より解剖の人が『今村大希じゃないのか』とか言ってるから、とりあえずその『今村大希』ではないことを証明するためにも大希がいてくれた方が早いんだよ。身元を明かすものがないんだ。照合するために指紋を取ったけど、本当にそれくらいしかないんだ」

「ふうん……よくわかんないなあ……」

二人が黙り込んだところを縫うように、タクシー運転手の落ち着き払った声がやってきた。

「お二人とも、そろそろ大学病院に到着しますよ」

未成は興奮の早口をやめて、小さく頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。」そして、思い出したように頼んだ。「あの、機密情報というわけではないのですが、ここで聞いたことはなるべく口外なさないで頂けるとありがたいのですが……」

純白の、いかにも病院らしい大きな建物の前で景色の流れが緩くなる。運転手は料金を確認しながら頷いた。

「はい。分かりました」

薬品の匂いが漂う、白やベージュを基調とした調度品の揃った病院に入ってみると、すぐに違和感に気がついた。カウンターの奥の受付や、廊下に行く白衣を来た人々の視線が自分に向かって飛んできると。ちらりと目を合わせてみれば、彼らはすぐにそれを逸らしてしまう。視線に含む意志を読み取る技能を身につけてきた大希

には、白衣の人々がいかにも驚き、そして不審に感じていることが簡単に読み取れた。風邪でしきりにゴホゴホやっている患者達から離れた席に座りながら、大希は受付の方から戻ってきた未成に目を向ける。

「よし。連絡は付けてもらったから、霊安室に行こう。そこで検視担当の人と落ち合うつもりだから」

「ああ。さっさとしようぜ。みんなジロジロ見てくるから、ちょっと居づらい」

「そうだね……まあ、仕方ないよ」

未成はそれだけ言って歩き出した。大希も膝を叩いて立ち上がり、足早にその細い背中を追いかける。未成は特に迷う様子もなく、立ち止まらず順調に病院の隅っこへと向かっていた。その後を追ううちに、大希は自分のしていることがわからなくなってきた。自分は一体何のためここにいるのか。自分に似ているという刺殺体を見に来たのか。だが、単なる他人の空似であって、自分には何ら関わりがない。そもそも、生存確認なら電話で済むだろう。考えれば考えるほど未成の考えが読みがたいものに感じられるようになっていた。「あんまり気分よくないな。自分の死に顔見るようなもんだろう？」なのに、俺には何の脈絡もないときた」

「だから、『今村大希』だとして譲れずにいる解剖医達に文句なしに理解してもらったためだつて。で、ついでだから見て欲しいな、つてことさ。あ、こんにちは」

未成は霊安室の前で待ち構えていた、小柄で、白髪を綺麗に整えた初老の男性に頭を下げる。だが、一向にその男性は未成に目を向けようとせず、食い入るように隣の大希を見つめていた。二人が立ち止まるやいなや、男性はいきなり大希に詰め寄ってきた。

「あなたが今村大希ですか？ 息をして、しっかりと生きているあなたか」

生きているも何も、ここまで歩いてきたのだから死んでいるわけがない。自分はロボットかと突っ込んでやりたくなつたが、相手は

かなりの年長者だ。上意下達の厳しい世界で生きている大希に、そんな小生意気なことを言う勇氣は無い。その鷹のような目に困った色を浮かべ、薄い唇をいっぱいに引き伸ばして苦笑いした。

「ええ。神奈川方面機動隊勤務、今村大希と申します」

「なるほど。そうかそうか……いやはや、申し訳ない。てつきり、先日お亡くなりになった方はあなただとばかり……」

やはり、実際の口から聞いてみると違う。本当に、検視担当も殺されたのは大希だと信じて疑わなかったらしい。そこまで言われると、ついに大希も気掛かりになってきた。そわそわと手の置きどころを探しながら医師に尋ねる。

「そんなに私と似ているのですか？」

「ええ。これは見て頂いた方が早いでしょう。こちらへ」

医師はゆつくりと霊安室の戸を引いた。がらがら鈍い音がして、圧殺されそうなほど重たい雰囲気を保った空間が開かれていく。最初は神妙に振る舞い、無表情で霊安室の中を見つめていた三人だったが、ほぼ同時に異変に気づき、そして医師は目を丸くして部屋に飛び込んだ。

「ない！ 遺体がない！」

雷に撃たれたように立ち尽くしていた大希は、望み薄だが、それでも全身全霊をかけて信じた事を尋ねてみる。

「そ、そんな。もう運びだされたんじゃない……」

「そんなことはない！」

医師はくると振り向き、つばを飛ばして叫んだ。その目は恐怖に見開かれ、手はわなないている。怪生のものに会えば、丁度似たような反応になるだろうか。それ程に医師の様相はひどいものだった。

「まだ遺体は解剖を待っていた。解剖がなかったとしたら、誰が好き好んで遺体なんか持ち去ろうとする？ 消えたんだ。忽然と消えてしまった！」

あまりに大きい医師の叫びを聞きつけたか、若い看護師が大希や

未成のそばまで駆け寄ってきた。いかにも戸惑った表情を浮かべた彼女は、心配そうに霊安室の中を覗く。

「い、一体どうしたんですか。かなり響いてますよ!」

しかし、医師は青くなつて近くの椅子に座り込んでしまい、顔を両手に埋めてうつむいてしまつていた。まともに答えられる様子ではない。それを見て取った未成が代わりに受け答える。

「先日殺害された、身元不明の遺体が解剖を前に消えてしまつたんです。しかも、誰も触れた形跡がないんです……」

看護師は目を見開いた。そして、大希がついぞ言つたことを復唱してしまつたが、答えはやはり同じだつた。この世で起きたとは思えない事象を前にして、看護師は彼女自身も知らないうちに後退りを始めていた。

「あ、あの……わ、私。知らせてきますね。他の人にも……きつと誰かが運び出したんですよ。きつと」

うわ言のように言い残すと、看護師は脱兎のごとく駆け出していった。それを見送った大希だつたが、自身もかなり混乱していた。

確かに、死体など持ち出す意義がない。そして、それが死体だつたからこそ、余計に『消えた』という結果に説得力を持たせてしまう結果になつていた。空想の絵空事をいきなり真実として突きつけられた大希は、その混乱を処理することができずに頭痛を覚えるようになってきた。しかも、その痛みはいや増すばかりだ。大希は歯を食いしばりながら、未成に引きつった笑みを見せる。

「お、俺、帰るよ。何だか頭が常に何かで叩かれてるみたいなんだ……」

未成も小刻みに頷いた。大希はひどく顔をしかめており、その辛さが見て取れたのだ。蒼白な顔で大希の背中を見送ると、そのまま未成はぎこちなく霊安室の方に目を向けた。その目を厳しくし、未成は遺体が存在したであろうベッドを凝視すると、未成は誰にも聞こえない声で呟いた。

「こんなことになるのか……」

外に出た大希は、急いでタクシーを捕まえる。最早まともの
を考えることもできなくなってしまった彼は、とにかく自宅のせん
べい布団に帰ろうと心に決め、走りだしたタクシーの中できつく目
を閉じた。

4th Period 夢の出来事

気づけば、大希は霧の中に立ち尽くしていた。滅多に無いほど濃い霧で、二メートル先さえはつきりと見えない。大希は周囲を手探りで確かめ、ようやくここが時計塔の下だと気がついた。自分がどうしてここにいいのか、いる必要があるのかわからなかった彼は、ひとまず自分の家に帰ろうと心に決めた。ところが、そう思った矢先に大希は不思議な声を耳にした。

「今村大希……」

大希は足を止めた。霧の中、大希は刮目して周囲に気を立てるが、この霧では声の主が全くわからない。彼は戦慄していた。その声が自分の声とあまりに似ていたからだ。大希は白い虚空に向かって叫ぶ。

「誰だ！ 一体誰なんだよ！」

「今村大希。お前も今村大希だ」

今度は前から後ろから、二つの方向から自分の声が聞こえてきた。この時点で、既に大希の理解を越えて世界は動いていた。虚ろな目で首を振りながら、大希は前に進むことも後退りすることもかなわず、ただ固まってしまった。そんな大希のもとに、周囲に染み渡るような靴音が聞こえてくる。そして、急に霧が晴れた。

「うわあ！」

大希は悲鳴を上げた。そこにいたのは何人も自分。三人、四人、五人。それどころではない。十人くらいはいるかもしれない。口が震えて、大希はまともに口をきくことすらできない。そんな大希の肩を、一人の“彼”がしかと捕まえた。

「な、何するんだ。やめろ！」

大希は必死に振り払おうとしたが、この世のものと思えない恐怖に縮みきった体では、剣道で鍛えてきた体も形無しだった。周りの“大希”の一人が、なんと自分の首に手をかけてきた。鷹のような

目で凝視し、獣のように歯を剥き出し、普段の整った表情からは遠くかけ離れた人外の笑みを浮かべながら、目の前の“大希”は首にかけた力を強めていく。大希は恐怖と絶望の入り混じった目つきで目の前の凶行を見つめていた。

その時だ。乾いた音が何度も何度も響き、大希の目の前で彼らは不自然に吹き飛び始めた。頭からつんのめるもの、胸を突き出すようにして吹き飛ぶもの、肩からきりもみに飛ばされて地面に打ち倒されるもの。最後に首を絞めている個体が目の前でどこかを撃たれ、静かに崩れ落ちていった。目の前の事態をまるで呑み込めず、大希は羽交い締めになれたままで遠くに目を向けた。すると、塔のちよつと真下に立っていた人物が、こちらに向かって銃口を向けていた。最初は助けが来たのだろうかと前向きに期待したが、その顔を見た途端、大希の心は地獄の底に突き落とされてしまった。

「お前も、偽者だ」

「うわああ！」

大希は絶叫した。周囲の空気を皆震わすほど絶叫した。その絶叫をも引き裂き、銃声が響いた

「ああ！」

大希は布団を蹴り飛ばして起き上がった。途端に、男所帯の埃っぽい臭いがして、目の前に乳白色の壁が現れた。足下には、いつも寝ているせんべい布団が敷かれている。眩しい朝日を浴びて、ようやく大希は自分が夢の世界に置かれていたことに気がついた。

「夢……？　なんだ。そうかそうか……」

大希は安堵のため息をもらしてしまった。考えれば考えるほど、奇っ怪でおぞましいシチュエーションだった。起きた大希には、それを夢と気付けなかった自分自身が不思議で仕方なかった。

「おう。起きたんなら食べちまえよ。軽いもの作つといたから」

居間の方から、どこか上の空の様子で健が大希に向かって呼びかける。大希は眠い目をこすりながらそれに黙って応じようとしたが、

立ち上がった瞬間に聞こえてきた音で立ち止まった。

少々電子的な銃声。銃火器の発射音。ある予感に大希は顔をしかめる。一足飛びに居間へ踏み込み、そしてテレビの方を見た大希はため息をついてしまった。

「お前、朝からゲームなんかするなって」

テレビの中で繰り広げられていたのは、一人の傭兵が基地の中へと潜り込み、あんな戦いやこんな戦いをしたり、ついでにダンボールに潜ったりする活躍劇だった。当然、銃声は鳴るし、ときおり爆発音さえ鳴る。本当のことを言えば、アクションゲームをするのが趣味の健のこと、今日明日のように二日連続で非番が続くという日に朝からゲームをしているのはさして珍しいことではない。しかし、この銃声が自分の夢に関わりあるだろうと思うと、大希は呑気にコントローラーを握っている健が少々許せなかった。ちゃぶ台の前にあぐらをかきながら、大希は口を尖らせる。

「おい。聞いてんのか。俺はニュース見たいの」

「わかったわかった。ちよつと待てって。セーブするから」

健は宣言通り、しっかりとセーブを始めた。再びため息をついた大希は、リモコンを手の内できると回したり、あちこちのボタンに指を置いたりする。別にニュースを見ようと思わなければ、健のことなど大希は放っておいた。健はゲームが上手く、見ていても楽しいのだ。だが、今日ばかりはそういうわけにもいかない。気になることが多すぎる。いらいらとリモコンの平らな部分を叩き始めた頃、ようやく健はゲームの電源を切った。

「そうかりかりすんなって。体に良くないぜ」

「うるさい」

健のからかうような言葉をすげなく払い、大希はさっさとチャンネルを回す。普段見ているニュース番組だが、幸い地方のニュースが報道されていた。大希は目の前の箸に手をつけることなく、じつとテレビを見つめた。

『先日未明、身元不明二十代の遺体が久宇慈市の住宅街で発見され

ました。警察は、殺人事件として犯人の行方を追っています」

昨日の事件は報道されるだろうか。大希はさらに聞き耳を立てたのだが、それ以上は何の情報も提示されることなく次のニュースへと入ってしまった。横浜であったちよつとした祭りの話で、殺人事件からは遠く離れた話題だ。大希はその結果に物足りないような、納得したような、そんな感情になった。二、三度繰り返して頷くと、ようやく大希はいただきますを言い、目の前の目玉焼きに手をつける。

「やっぱり、箱口令かとうれいというか、やっぱりあんな事は伝わっても報道されないよな……」

大希の呟きに興味を示し、テレビから目を逸した。

「え。どうして箱口令を敷くようなことがある？　というか、今日伝えられるのはあれが全てだろ」

大希は健の不思議そうな瞳を見つめた。表情まで少年じみている。大希は勘定した。果たして昨日の出来事を話して、健が信じるだろうか。そしてすぐに答えは出た。健はそのようなお化けや怪奇現象の類を全く信じないのだ。つまり、話したところで無駄ということである。

「ああ。まあそうだよな……」

長く息を吐き出しながら、大希は惰性でニュースを見つめる。そこにあったのは、久宇慈市の湾岸部にある一つの研究所だった。

『久宇慈量子化学研究所が、一二六番元素の研究と並行し、一三七番元素の研究に着手しました。一三七番元素とは、リチャード・フアインマンによって、存在可能な最後の元素と指摘された元素であり、その名を取ってフアインマニウムとも呼ばれる元素です』

久宇慈量子化学研究所。この誕生には曰くがあった。十二年余りの長さにわたって職務を全うしている現市長は、初めてその任に就いた時、『時空都市、久宇慈』という、親父ギャグにも似た雰囲気を持つしようなないネーミングのスローガンを掲げた下で、近未来的な雰囲気を持ったまちづくりを目指したのだ。時計塔もその一環

の一つである。そんな市長だから、研究所を建てるという計画が持ち上がった時真っ先にアピールし、そして受け入れられた結果できたのが『久宇慈量子化学研究所』なのだ。

「よくやるよな、研究者の皆さんも。一三七番元素なんか、どこで活用するかわからねえよ」

「まあ、作れただけで価値はあるだろうし、そこが大事なんじゃないの？」

「まあ、そうなんだろうけどさ……」

途方もない構想のニュースを見つめながら、二人はのどかな朝を過ごしていた。

所も時も変わって、未成は昼頃からずっと署の鑑識課でパソコンをいじっていた。それほど事件も起きない久宇慈市では、その規模も大して大きいことはなく、学校の教室ほどの広さの中、雑然とした設備が広がっている。その一角に陣を構えた未成は、同僚や上官から度々視線を送られつつ指紋の照合を行っていたのだ。そして、未成は抱いていた疑念を確信に変えることとなる。

「やっぱりだ。そうなるしかないもんね……」

未成はぼそぼそとパソコンに向かって呟く。その画面に広がっていたのは、消えてしまった遺体から取った指紋が、しっかりと今村大希の指紋と一致していた事を示すものだった。彼の声は小さかったが、静かな部屋では十分聞こえていた。上官がすぐさま立ち上がり、未成のそばまで駆け寄ってきた。

「どうした。何がそうなるしかないんだ？」

未成は上官の目を見て頷くと、そっとパソコンの画面を指差した。ざっと目を通した上官は、しばらく漠然と画面を見つめていたが、その結果を飲み込めた瞬間、いきなりその目を見開いた。

「どういう事だ！ 奴、昨日からピンピンしてたろう！ どうなってるんだ！」

未成はいきなり胸ぐらを掴まれる。目を白黒させながら、未成は

何とかその腕に手を重ねる。

「や、やめてください。僕にわかるわけじゃないですか……」

「あ。そ、そうだな……」

もつともな言葉に冷静さを取り戻し、上官はそつと未成の胸ぐらから手を放した。すっかり毒気が抜かれた様子の上官に、未成は曖昧な顔で笑ってみせた。取り乱す上官など今まで指で数えられるほどしか見たことがなく、もう一人いた同僚も未成達の所まで駆け寄ってくる。

「い、一体どうしたんですか？」

「いや、これを見てくれ」

「これですか？ あ、な、何で大希が……」

未成はじつと指紋のデータと大希の名前を交互に見つめる。後ろで慌てている二人の声が遠く、くぐもって聞こえる。未成はそれ程に深く思案の海に飛び込んでいたのだ。

紛れも無く、未成は『大希』という存在が複数あることに気がついていった。しかし、それを確信めいて大希に伝えれば、間違いなく頭のおかしい奴と思われるしまう。だから、大希には実感としてその存在を知らしめておくつもりだった。しかし、それも叶わず、遺体は消えた。そこは未成にとって予想外の出来事だった。そもそも、その存在を消そうとした人間がいたことに驚きだった。果たして、ただの通り魔なのだろうか。未成はそこまで踏み込み考えていた。

「誰が、何のために殺した……？ 殺す必要がある存在にも見えなかったはずなのに」

何かが変わろうとしている。『この』2012年に、何かが変わり始めている。未成は心の中、自分に向かって語りかけた。そつと未成は周囲に目を配る。同僚の二人はこの事実をどこかへ知らせに行ったのか、課から消えてしまっていた。見ている人物がいないことを確認すると、未成は素早くインターネットを開き、アドレスを打ち込み始めた。

その間にも、未成は大希にこの事実をどう伝えたものか考えてい

た。

5th Period 飲み帰りの出来事

久宇慈警察署の休憩スペース。フロントからでは全く見えないところであり、警察署に油断した雰囲気を持たせないよう配慮されていた。自販機が置いてあったり、やや柔らかい椅子があったりして、狭いが概ね快適なスペースではあった。使う人は、大半がアクリル張りの喫煙スペースに入っているが。その中でタバコをふかしている他課の人々ときおり目を配りながら、大希と未成はプリントされた指紋照合の結果を挟んで向かい合っていた。

「くっだらないなあ！」

未成に延々話を聞かされた後の開口一番、大希はのけぞりながらそう叫んだ。せつかくの非番二日目、健がせつかく誘ってくれたからと、自分も健と共にコントローラーを握って健とゲームを楽しんでいたところだった。だが、いきなり大希は未成に呼び出された。指紋照合の結果が出たから、自分が休憩時間のうちにちょっと来て欲しいと。親友の頼みのこと、面倒だったが仕方なく赴いてやったのだ。それが、さらに面倒な話を聞かされるきっかけとなってしまった。

「くだらないって……僕は真面目だったのに。証拠もあるし」

「証拠って！ 指紋なんか、十万分の一の確率で同じになっちゃうんだろ？ それで、殺された被害者が俺のクローンみたいな存在だなんて、馬鹿げてるんじゃないか？」

舌鋒鋭い大希の言葉に肩を縮こまらせながら、未成はそれでも愛想よく笑った。本当に、この男はめったに怒るということをしなない怒るということを忘れてしまっているかのようだ。資料をまとめ直し、未成は冷静に答ええた。

「大希。君は世界に三人ほどこしか自分に似ている人間がないとい

つたじゃないか。一応遺体の写真も今見たでしょ？ 世界に三人ほどしかない人間が、さらに十万分の一の確率で指紋が一致しているなんて、有り得ない確率じゃないか」

未成の飄々とした言葉に、大希は思わず口を塞がれてしまった。未成の言葉を噛み砕くように口をもごもごとさせ、顔をしかめる。確かに遺体の写真を見た。その顔には痛みに苦しんだ様子も、安らかな様子もなく、ただ魂が抜けていったような、そんな空虚な死に方を如実に表していた。だから、鏡に写したぐらいに似ている様子をしっかりと確認できたのだ。

「そりゃあ……未成の言うとおりさ。顔も指紋も同じような人間なんて、そうはいない」

けれど。大希は心の中で呟いた。やっぱり俺は、そんな事を認める訳にはいかない。自分が知らない所でクローンが作られていたなんて、馬鹿な事は信じられない。

「でも、俺みたいな没個性的な顔なんか、どうせ他にも似てる奴はたくさんいるだろ」

「そんな事言うなって。イケメンだよ」

「うるせえや」

かつこいいと言われて嫌になるほど捻くれた人間ではなかったが、話をごまかされたくはなかった。大希は身を乗り出し、その人差し指を未成の真っ直ぐな鼻先に突きつける。

「あのさ、一応技術的にはできるわけだし、可能性については、可とすることにするよ。クローンを産む人もいるとする。で、俺がクローンの素体になったとするよ？ 俺はその事を全く覚えていない。クローンにしてまで複数用意したいほど有用な人間でもない。やっぱり無理がある」

「そう言われたら、そうなのかもしれないけど……」

仰け反り至極残念そうに顔をしかめている未成に、大希はさらに迫った。昨日の夢は、まだしっかりと覚えていたのだ。

「俺、昨日クローンに襲われる夢なんか見たんだぜ？ しまいには

ズドンだ。お前がクローンの話なんかしなかったら、俺は絶対そんな夢を見なかったね」

未成はついに諦めた。これはいかに手を尽くそうと、この事實は理解してもらえそうにない。だが、まあそれならそれでも構わないし、彼に何か異変が起きた様子もない。全くの安泰だ。ならば、長々この話題を引つ張るのは友情の障害となるに違いない。

「わかったよ。ごめん。もうこれ以上変な事は言わないよ」

未成がそつと手を合わせて頭を下げる。大希もこれ以上詰め寄るつもりは無く、腕組みをしてため息をついた。

「まあいいさ。本当に、そうだと信じたいくなるような事件だったしな。それじゃ、俺は帰るよ」

大希はソファーから重い腰を上げた。今ごろ健が昼食をこしらえて帰りを待っているころだろう。すぐに帰ろうと思った大希だが、一つ思い出したことがあった。休憩スペースの入り口で立ち止まって振り返る。

「……なあ、仕事が終わって暇なら、ほんの少し飲みに行かないか？」

「え？……あ、もちろん！でも給料日前で……」

どこか驚いたような顔をした後、すぐに頷きかけた未成だったが、自分の懷事情を思い出してうつむく。その様子を見て、大希は小さく笑った。

「いいよ。俺がおごるから。もちろん、俺もあんまり金は出せないけどさ」

「本当かい？よかった。なら行くよ。行く行く。なんだか大希、最近不満がありそうだしね。お礼に愚痴くらい聞くよ」

屈託なく笑う未成の言葉に、大希は先日のテレビの光景を思い出した。全く満足は出来なかったが、酒の肴にはなるかもしれない。大希は微笑み、小さく頷いた。

「ああ。頼む」

駅前、大手の居酒屋の隣にある小さな店舗。年老いた店主が道楽で商売しているためか、この店はかなりおつまみの値段が安い。いつも大希や、彼らの友人はこの影に隠れた良心的な店で飲んでいるのだった。

座敷になつてゐる席の隅に座り、二人は大手を避けてきた他の人々を見つめながらおちよこを傾けていた。焼き鳥の香ばしい匂いが店中を包み込み、畳の間はどこか家のようにくつろげる。カウンタ―に座れば、店の親父が嫌味も言わず愚痴を聞き、的確なアドバイスを授けてくれる。大手の込み具合に辟易し、この外装は少し汚れた店に入つてみる勇氣が湧けば、この店に間違いなくハマつてしまふ。大希達はそういうクチだった。

「あの人達もどこか楽しそうだね」

ほんのりと頬を赤くした未成は、カウンターに座つて親父と話の花を咲かせている三人のサラリーマン達を見つめていた。大希はこんがりした焼き鳥を口に運びながら微笑む。

「ああ。ああして俺や健、剣人もここで飲むようになったからな。あの人達もちよくちよく来るようになるさ。大手みたいにわいわい騒ぐ雰囲気じゃないけど、そこがいいんだよな」

息をつく、大希は隅に設置されているテレビを見る。ちょうどニュースが入つていて、見出しには『超光速物質の存在が立証』という文字が躍つていた。朝にそのニュースを一度見ていたが、やはりこの話題には惹かれるものがあつた。

「なあ、未成はこのニュース見たか？」

「うん。もちろん見たさ。ニュートリノがついに超光速の物質として実証されたつてことでしょ？ 本当にすごいことだよ」

「ああ。ちょうど去年に報告されて、ついに今年実証されたつてわけか。この物質のお陰で、時間の逆行やワープの存在も示唆されたんだ。いやあ、感動的だな」

お酒で少なからず勢いがついていた大希は、そのまま先日から溜め込んでいた愚痴に走る。

「全くさあ、この前そういう感じのテレビを見てたんだ、俺」

未成は枝豆に手を伸ばしながら耳を傾ける。素直に聞きへと回ってくれた未成に気を良くし、大希はすらすらぺらぺら話し始めた。

「深夜番組だったんだけどさ、タイムトラベルについて議論するっていう話だったから、俺ずつと楽しみにしてたんだよ。わかるでしょ？俺、インターネットで予習までしたんだぜ？そしたらさ、

その予習で得られた知識ぐらいしかタイムトラベル可能派は言い出さなくてさ、否定派にコテンパンだよ。もう、完膚なきまでとはああいうのを言うんだろうね。こっちはわざわざ夜更かししてまで見てやったつてのに、とんだ目にあつた。その後剣人や健にからかわれるしさあ……もっとレベルの高い議論はできなかったもんかね」

ぐいとおちよこを傾けた大希を見て、未成は目を細めて優しく微笑んだ。

「それは大変だったね。でも、このニュートリノ実証がきっかけで、タイムトラベルが可能なものとしてこれから議論されていくんだよ。間違いなく」

おちよこを食卓に置いた大希は、未成の励ましを聞いて嬉しそうに頷いた。

「ああ。あのボケ老人のエセ科学者どもじゃなくて、本物の科学者がまじめにタイムトラベルを議論する日が生きているうちに来るかもしれないって思ったらわくわくするな。やっぱりこういう話題はいいよなあ」

天井を見上げ、しみじみと語尾を引き伸ばした大希。それよりさらにしみじみと、むしろ寂しそうにも見える目をして、未成は深く頷いた。

「ああ。きっとタイムトラベルはできるって、言われるようになるよ」

未成は、SFの話題にはさほど酔えなかったようだ。彼のあまり好ましくない表情を悟ったのか、大希は一旦口をつぐみ、それから再び口を開いた。とりあえず話を変えることにした。本当に話した

かった話題に。

「なあ、そんなことよりもっと気になることがあるんだ」

「何だい？」

大希は周囲に気を配る。カウンターの人々は気持ちよく飲んでるのだ。こんな話を聞かせるのは悪い。そう思った大希は、未成の方へと思い切り顔を近づけた。

「この前の遺体だよ。あれが俺じゃないにしても、不思議なことがもう一つある。何で消えたんだ？ それとも、やっぱりどこかに行つてただけなのか？」

あまりに急な話題転換に、未成は瞬間目を丸くした。しかし、あの程度予想はしていたことだったから、その対応は柔軟だった。彼も周囲に気を配り、手でかばいながら小声で答えた。

「消えたんだ、本当に。何にもない。行方知れずなんていう度を越してる、というのが結論だよ」

「そうか……消えた。俺達は狐にでも化かされてるのか……？」

彼は大きくオカルトチックな話に興味を示すタイプではなかったが、これまでの生き方に方針の転換を迫られているような気が大希はしていた。だが、未成は力強く首を横に振る。

「そんなレベルじゃないと思う。そんな、そこらへんに転がっているような話の出来事じゃないよ。これは」

普段は控えめなはずの未成が今に限ってはかなり力強い語調だった。そこに目ざとく気がついた大希は、小さく心の中で小手に踏み込んでみる。

「なあ未成。お前、本当は何か知ってるんじゃないのか？」

未成はいきなり顔を上げて目を丸くした。ドキッとした、らしい。眉根にしわを寄せてため息をつく、未成は静かに首を横に振ってみせた。

「そんなことないよ。僕が知ってる理由があるかい？」

「ああ。まあそうだよな……」

大希はぼんやりとした調子でとつくりを傾ける。その間にも、意

識は消えてしまった遺体で頭がいっぱいだった。いきなり未成が大声を上げるまで、その調子は収まらなかった。

「ねえ大希！ 溢れてる溢れてる！」

「あ！ うわあ、やっちゃった……」

小さいおちよこから溢れ、テーブルの上に光る焼酎。顔を見合わせる、二人はお互いに苦笑してしまった。

結局二人は他愛のない話に落ち着き、結局十時頃まで飲み続けた。その調子で長々話し続けるのかに見えたが、結局大希は健康優良児を地で行く青年だったため、それ以上は飲まずにのんびりと帰り道に就いたのだった。

「さあ、明日は仕事だしなあ、さっさと帰ってゆっくり寝るかな……」

住宅街の路地の中、大希は伸びをして夜空を見上げた。よく晴れた夜に月が映えている。大希はひんやりした気持ちのいい空気に包まれながら、ほっと長々と息をついた。親友のこきげんな様子に、未成はやはり嬉しそうに微笑む。

「よかった。愚痴を言っただけは気分が晴れたのかな」

「ああ。大分助かったよ。これでまた明日から、訓練に没頭できるさ」

「頑張りなよ。いざという時が、いつ訪れるかはわからないからね」

未成がそう言って微笑んだまさにその時だった。何の気もなしに路地の分かれ道へと目を配った時、思わず自分の気が確かかどうかを疑ってしまう光景が目飛び込んできた。

「嘘だ……」

未成は茫然自失とし、呻きにも似た言葉を洩らした。その目の前には、二つの人影。向かい合うようにして立っている。だがどこか不自然だ。どこが不自然かというと、一人の男は胸に向かって腕を突き出し、もう一人の男はその背中から何か突き出ているのだ。間違はなく、殺人が行われたまさにその瞬間だった。

大希も言葉を失った。人死にを見たのは円満なものがわずかしかない。殺される瞬間を見るなど、かの事件ですら無かった。凄まじい衝撃に、大希はしばしその光景を見つめていることしかできなかった。

だが、大希も職務を思い出す瞬間がすぐにやってきた。刃物を抜かれ、一人の男が倒れ伏した瞬間を見た途端、大希はその身を駆り立てる使命感が湧き上がった。誓ったのだ。この世の悪をくじく警察になると。その警察になった今、目の前で人を殺した男を放っておくわけにはいかなかった。目をらんらんと輝かせ、大希はいきなり突進を始めた。

「お前！　そこで大人しくしろ！」

大希の吼え声に気が付き、手を汚した男が彼の方へと向き直った。大希は目を細める。その男の顔を確認できないのは、ただ単に暗がりの中というだけのことと思っていた。しかし、そうではなかった。その男は返り血を浴びたマスク、そして黒い頭巾を深々と被り、その顔を窺えないようにしていたのだ。

「サツか……？　いや、お前は……」

殺人者は大希と倒れている男とを見比べるような動作をした。その隙を突いて、大希は殺人者に向かって鋭い蹴りを突き出した。しかし、やはり大希は酔っていた。その蹴りは見事に照準を外し、殺人者の肩あたりを捉えてしまっていた。威力も弱く、殺人者を突き飛ばすはおろか、痛みに呻かせることさえ叶わなかった。

「俺の邪魔をするな！　今村大希！」

「どうして、俺の名前を、知ってる！」

殺人者は鋭い拳を大希の鳩尾めがけて振り抜こうとする。大希は突きを外す要領でその拳を叩き落とし、素早く蹴り上げた。だが、これは殺人者が簡単にかわしてしまう。そこから殺人者の動きは早かった。大希を手で突き飛ばしてバランスを崩させると、そこにナイフを構えて一気に襲いかかった。

「ぐあっ！」

ナイフは大希の横腹あたりを捉えていた。焼け付くような激痛が腹から全身を駆け巡る。しかし、大希はそれしきのこととくたばるような人間ではなかった。ナイフを掴んでいた殺人者の手首を掴み、思い切りその筋肉が薄い部分を狙って殴った。人間としての本能がいきなり腕に危害を加えられて殺人者は大希に刺さるナイフを手放してしまった。

「未成い！ 救急車頼む！」

「あ、ああ。わかった！」

痛みで頭がもうろうつとするのをこらえながら、大希はナイフを抜き放った。せつかく止まっていた出血が蘇る。痛みも蘇ってきた。だが、余計に動かれて傷が広がるよりはずっとましだろうと大希は考えたのだ。救急車も上手く事が運べばすぐに来るだろう。大希はとにかく殺人者を取り押さえようと飛び出す。ナイフは奪ったのだ。後は自分が気を失うまでにかかる時間との勝負だとしか考えていなかった。次の瞬間までは。

「うああ！」

乾いた銃声が周囲に響き渡る。それと同時に大希の肩から血が舞った。衝撃に耐えられず、大希は道にもんどり打って倒れこんだ。腹と肩を襲う激痛に、今度こそ大希は敗北を知らされることとなる。男はゆつくりとそばまで歩み寄り、銃口を大希の額に押し付ける。大希は冷や汗が吹き出してくるのを感じた。殺される。大希は確信してしまった。彼の身が硬くなっているのは、怪我だけのせいではないだろう。息を荒げ、大希はただただ無慈悲な殺人鬼を見上げていた。

「お前は違う。邪魔立てするならこうしてやるが、黙っていればなにもしないでおいてやる。わかったか」

それだけ言い切った殺人者は、ゆつくりと額から拳銃を離れた。大希が目を見開いたままではいる中、男は悠然とナイフを拾い上げ、拳銃を懷に収める。そして、その男はさも普段通りの仕事をしたかのように、口笛を吹きながら歩き去っていった。

どうやら殺されずには済んだらしい。しかし、薄れていく意識の中、燃え上がる悔しさだけが、大希の中に残っていた。何とかうつぶせになり、起き上がろうとしながら大希は歩いて行く男の背中に手を伸ばした。

「この、野郎……」

しかし、その手は全く届かない。悔しさに顔を歪ませ、拳をアスファルトに打ち付ける。その痛みが、ほんの少しの時間、大希に倒れるまでの猶予を与えた。そして大希は被害者の顔を確かに見た。そして、これまで無かったほどに驚愕した。

「そんな！ また……俺なのか？」

倒れていたのは、紛れもなく虚ろな顔をした自分だった。いよいよ大希は混乱する。頭の中がいろいろな感情でこった返し、血の足りなくなった頭はすぐに限界を迎える。

「ちくしょう……どうなってるんだよ。誰か教えてくれ、よ……」

大希は未成が慌てて駆け寄ってくる足音を耳にしながら、静かに意識を失った。

6th Period 倒れた後の出来事

大希はまたしても霧の中にいた。ただ、その霧はあまりに異質で、まるで演出に使うドライアイスの煙のようだ。そして、立っているのはまた時計塔の前。今度の大希はすぐに気がついた。

「今度も夢か……？」

夢だと思い当たったのはいいが、結局大希には夢から出る術がない。諦めた彼はその場にあぐらをかいて、横腹に手を当ててみた。傷は無い。だが、刺された痛みも撃たれた痛みも思い出し、大希は顔をしかめてしまった。大希は考える。あの後自分は怎么样了だろうか。夢を見ているのだから、死んだという事は万が一にもあるまい。無事に救急車で病院に運ばれ、輸血を受けたり、傷を縫われたりしながら一命を取り留めたに違いない。結論に至った大希は、ため息をもらした。安堵のものかという、決してそれだけではない。

「あーあ。井上^{いがみ}さんにどやされちまうなあ。酔って犯人を取り逃がして、その上大怪我を負ったなんて……」

自分の足元を見つめて頭を掻く。誰からも鬼と恐れられている上司の目に付いたのは間違い無いだろう。目を覚ました途端に大目玉かと思うと、目を覚ましてしまうのもなかなか億劫だった。だが、夢の中にいたところで、することも見つからない。全く困ったものである。大希は諦めたような顔で時計塔を見上げた。

「やつぱり起きなきゃダメだよなあ。どうしたら起きられる？」

時計塔に聞いたところで何か答えてくれるわけはなく、相変わらずその文字盤は厳格に時を刻んでいた。大希は言葉も無くその文字盤の数字が移り変わっていくさまを眺めていた。五十九分、〇分、五十九分……。

「え、おい。一体どうなって……」

大希は思わず呟いた。そのうちにも、どんどん時計の数字がめちやくちやに移り変わっていく。加速度的に時計が巻き戻ったかと思

えば、今度はゆっくりと進み始める。夢の中なのだから何が起ってもおかしくはないが、いったい心の奥底で何を考えているのか怪しくなる。訝しんで時計を睨みつけていたら、急に時計塔の足元が輝き始めた。大希はいよいよ言葉を失い、弾かれたように立ち上がって後ずさを始めた。その間にも時計塔の足元の光は青白さを増し、霧が急に濃くなっていく。大希は、これは夢だと言い聞かせなければ、まともにその光景を眺めていることができなかった。

急に光が失われ、今度は周囲を包んでいる霧ごと闇に包まれた。その闇は大希に強い印象を植え付け消えていく。後に残ったのは、この世のものではなかった。

ロボット。その姿を見上げた大希の頭にはすぐにその単語が浮かんできた。金属の関節がのぞき、白に塗装されたフレームを持ち、低い電子音を響かせているその様子は確かにロボットにみえる。だが、その外見はあまりに凶暴だった。三体のそれは、サソリにクモ、そしてカマキリをそれぞれ模しており、見ただけで萎縮させられてしまっただろう。

さらに困ったことには、凶暴なのは決して外見だけではないということだ。サソリの尾やハサミには銃口のようなものが取り付けられているし、クモはどんな攻撃をも撥ね付けそうな外見をしている。カマキリの腕は、全てを貫き破壊してしまいそうだ。戦うために生み出された、巨大、強大な機械達であった。

そんな圧倒的な存在を前に、大希は恐怖し凍りついた。しかし何故か、初めて襲われる恐怖だとは思えなかったのだ。大希は心の中で呟く。

……デジャヴュ？ いや。ここが夢の中なんだけどな……

既視感に恐怖が少し緩み、大希が目を細めたその瞬間だ。急にサソリが切れ長の目を光らせてこちらを睨む。同時にハサミを振り上げこちらに向けてきた。そのハサミの根元で光っているのは、ガトリング砲の銃口だ。それに気がついた大希は、咄嗟にその場から逃げ出した。轟音と共に銃弾が飛び、地面に亀裂を作っていく。大希

は必死に逃げた。甲高い電子音が響き渡り、エンジン音と金属音が混在した耳を塞ぎたくなるような音を響かせながらサソリ、そしてクモが動き出す。確かに大希の姿に狙いを定め、その眼を赤く光らせながら追ってきた。反対に大希は蒼白になり、抵抗もままならなままにただただ逃げ続けた。

「何で追ってくるんだよ！ 止まれ！ 止まれよ！」

既にこの世界が夢の中だということなど、頭から吹っ飛んでいた。生きたいという思いに任せ、大希は必死に走り続けた。無力で哀れな一人の青年に向かって、サソリ達の発した無機質な音が追いかける。

「Follow the given command . Follow the given command .」

「何だよ！ 来るな！」

「Follow the given command .」

大希の叫びも虚しく、サソリ達は無感情に迫ってくる。サソリの放った銃弾のせいで地面が砕け、大希は躓き地面に叩きつけられてしまった。それでも大希は、這いつくばったままで一步でも先へと進もうとする。振り返ると、サソリがその銃身を光らせ、こちらへ正確に狙いを定めているところだった。

「やめろ……やめろお！」

その刹那。突如サソリ達の動きが固まった。

「Follow the given command……」

その目を白黒させ、閉じようとするハサミを必死に開こうとするサソリ。クモの方は、必死に一步を踏み出そうとしている。大希は何がどうなったのかもわからず、尻を擦るように後ずさりしながら、その姿を見つめた。サソリの目から光が消えた。クモの目からもなくなった。途端、ただの置物と化したその二体はその場に崩れ落ちてしまう。肩で息をしながら、大希はぼんやりとそのガラクタを見つめていた。その時、いきなりカマキリがサソリやクモを引き裂き現れた。大希は再び飛び上がる。

「ああ！ 忘れて」

大希が言うか言わないかのうちに、カマキリはその鎌を大きく振り上げる。が、いきなり大希の目の前でカマキリもまた崩れ落ちた。その呆気無い幕切れに戸惑い、大希は言葉を失ったままでその姿を見つめ続けていた。

「大希」

エタノールの匂いがわずかに漂う白い病室の中。聞き慣れた親友の声で、大希はようやく目覚めた。未だ霞んでいる視界の中で、大希は未成の姿を捉える。

「未成……？ あれ。サソリのロボットは？ クモも……カマキリも……」

すっかり混乱しきったように見える大希の目を見て、未成は顔をしかめてため息をついた。

「何を言ってるのかわかんないよ。君は刺されて撃たれた後、病院に運ばれて緊急の手当を受けたんじゃないか。あの夜から三日、大希はずっと意識を失くして寝込んでたのに。みんな心配してたよ」

「み、みんな？」

大希は自分が寝かされていた白いベッド、そして腹に巻かれている白い包帯に目を落とす。右腕には点滴が繋がれている。ようやく大希は現実と非現実の区別が付き始めてきた。よくよく考えてみれば、あんな存在がこの世に、この久宇慈市に存在しているはずもない。大希は自嘲気味に小さな笑い声を上げた。

「そうか……あれは夢だったか。そうだ。夢だ夢だ」

ようやく普段通りの真っ直ぐな男に戻り始めた大希を見て、未成はほっと胸を撫で下ろした。いつものように小さく微笑み、彼の肩を叩いた。

「よかった。やっとまともに話ができそうだね」

「話？ ああ。そうだ！」

大希の脳裏に、倒れる寸前に見た被害者の顔が蘇ってきた。今度

ははつきりと見た。あれは自分だとしか言いようがない。街灯の元に照らされたその顔は、どこを取っても自分にそっくりだった。大希は未成に詰め寄りたいところだったが、点滴で動けないため首だけ向ける。

「なあ、被害者の人はどうなった？　また俺に似てたじゃないか！　一体どうしたことだか……」

未成もまさにその話をしようと思っているところだった。ただ、再び取り乱したこの様子で聞いてくれるとは思えない。彼の肩を叩き、髪をかきむしっている大希をなんとかだめる。

「焦らないで。焦ったら、余計に次の話でびつくりするよ」

「あ、ああ。わかった……」

大希は肩をすくめ、ゆっくりとベッドにもたれかかる。何もわかっていないうちから慌てたところでどうにもならないことは、彼も気がついていた。首を二、三度振って、大希は未成の顔を見上げる。

「結局、あの後どうなったんだ？」

単刀直入の質問。未成は慎重に話の展開を練った。こちらも単刀直入に返せば、必ずや大希は驚くだろう。一応重傷を負っているのだ。負担をかけるのは良くない。大希の急かすような目に愛想笑いで応えながら、未成は一言一言丁寧に話し始めた。

「いいかい？　落ち着いて聞いてくれよ。まず、被害者が君に似ていたという話だったけど、これには刑事部の方もいよいよ怪しがり始めたんだ。あ、これ以降話は隠匿されてる……隠匿する必要は無いんだけどさ、平凡に生きている人が信じてくれるわけがないからね、仕方ないんだ」

未成が一語一句確実に話していくものだから、話が非常に間延びした。特にせっかちな性質を持つわけではなかったが、あまりの遅さに大希はいくらなんでもイライラさせられてしまった。腕を組もうとして、改めて両腕が動かせないことに気がついて顔をしかめ、左手で軽く布団を叩きながら大希は眉を寄せた。

「前置き長い。その内容を教えてくれって言ってたぞ」

「ああ。ごめんごめん。色々な話が持ち上がったよ。あの死体が消えたのは、蘇って、こうして再び殺されたからだとか、僕が前に言ったみたいに、クローンがどうか。うん。自分で言ってる分にはわからないけど、他から聞くとナンセンスに聞こえるね」

目を光らせ、真剣な様子で話を聞いていた大希だったが、未成の冗談に再び脱力させられる。

「だからあ。そういう冗談はいらないから、さっさと先を話してくれよ」

「君に楽にしてほしいから、こういう言葉を挟んで上げてるんじゃないか」

「そう思ってるなら逆効果だ。余計イライラするからな」

両手を挙げてとりなそうとする未成を、大希はばつさりと切り捨てた。未成はため息を洩らし、鼻頭を掻いた。怒られるようでは仕方がない。

「それならいいよ。わかった。で、これは指紋検査だけじゃ怪しいということになって、ともかくDNAの検査を試みようということに決まった。でも、また消えた」

「なんだって！」

大希は素っ頓狂な声を上げた。未成は言わんこつちやないとでも言うかのように顔を曇らせ、大希の頭を小突いた。

「だから気楽に落ち着いていて欲しかったのに……」

他のベッドでも病人が動き出している。二人は少し申し訳ない気分になった。未成はさらに大希の頭を小突き、大希はすっかり小さくなってしまった。隣では、一人の患者がこちらを睨んでいる。未成は愛想笑いで頭を下げ、今度は大希に耳打ちした。

「まあいいか……最後まで話をするね、結局その正体はわからなかった。嚴重に管理されているはずのDNA検体までなくなっただけか」

「まさか。じゃあわかったことは、結局あの遺体が確実に消えたことだけか？」

大希のうんざりしたような声に、未成は苦笑いで答えた。それから、二人は示し合わせたくらいに同じタイミングで肩を落とす。本来はありえないはずの出来事がたくさん積み重なり、壁のように厳然と二人の目の前に横たわっていた。大希は唸る。今になってみると、以前はどれだけ突きつけられている不可思議をかわす手段があっただろう。今は受け入れる以外に無いように思えた。だが、大希は認められなかった。健もこの手の話題には相当頭の硬い奴だと彼は思っていたが、大希も十分頭が硬かったというわけだ。彼は肺から全ての空気を搾り出すようにため息をつく。

「知らねえや。もういいよ。そもそも、これを考えるのは未成達の役目であって、俺が考えるようなことじゃない。これ以上はもう考えない。考えれば考えるほど、頭がこんがりそうだし」

「え。待つてよ。君にも十分関わりがあるんだから、君にも一緒に考えて欲しいんだけど……」

未成の言葉を潔さの無いものと受け取り、大希は顔をしかめた。「嫌だね。こんな、よくよく考えてみれば、こんな……話、向き合う気になれない」

馬鹿馬鹿しいと言えなかったのは、警察官としての矜持があるからであつた。怪生の類とさえ思われるような存在でも、死んだには違いないのだ。大希はがくりとうつむいた。

「くそ……俺は一体どうしたらいいんだよ？ 被害者を気の毒に思うことすら難しくなつた。被害者のために、何が何でも捕まえようと思うところを、いきなり自分は加害者の動機を探つて。順序が違ふんだよ。何であれ被害者の為に全力を尽くすのが当然だし、動機はともかく、まず加害者を捕まえないと話が始まらないんだ……わかつてることなのに、全部がおかしくなつて。俺と寸分違わない外見だつてことで」

搾り出された大希の言葉に、『犯罪者を捕まえられなかった』という責任の重みを感じた未成は黙りこむ。励ましてやりたいと思うところだったが、未成にはふさわしい言葉が見つけれなかった。

「あ、えっと……その……」

口ごもる未成は、頭を掻いたり、手を揉んだりすることしかできなかった。何か言おうと口を開いたり、断念して閉じたりしているうちにも、気まずい時間が経っていく。そんな時に、柳剣人は現れたのだ。

7th Period 病院での出来事

リングが詰まった網をぶら下げながら、剣人は大股に大希の横までやってきた。大希は顔を向けず、横目で剣人のことを捉えた。彼は黒いスラックスに白い長袖シャツ、そしてまた黒いベストという全く可愛げのない格好だ。この男はあまりカジュアルというものを知らないのだ。そんな生真面目な男がやってきたところで、この暗い雰囲気は晴れない。

「剣人か。こんなところまでどうした？ 非番だったのに」

剣人は口元にうつすらと笑みを浮かべ、そっとリングを顔の高さまで掲げた。そしてさっさと病室の隅の椅子を二つ取り、未成の隣に並べて座ってしまった。それから、無造作にリングをテーブルの上に置く。

「差し入れを持ってきてやったんだ。理由は一つに決まってるだろう」それから、剣人は開けっ放した扉の向こうに目をやる。何かを待っている様子だ。大希や未成もつられて廊下に目をやる。一時流れる静寂。それから三人の目の前に現れたのは、一人の女性だった。小さなメモを手にとって、おそらく病室の名簿を確認しているのだろう。その丸い目をきよきよとさせている様子は、まるでリスのようだった。剣人は一瞬愛おしそうな目をして、それからその女性に向かって手招きする。

「おい、さくら。こっちこっち」

さくらと呼ばれた女性は、すぐさま剣人を視界に捉えた。自分や剣人の幼なじみであり、剣人の恋人でもある彼女。その明るい笑顔でこちらまでやってくるのだろう。大希はてっきりそう思ったが、そうはならない。彼女は頬を軽く膨らませ、長いスカートをなびかせながらやってきた。

「置いてかないでよ。結局病室を聞き直す羽目になったんだからね」デニム生地のスカーツにブーツを履き、クリーム色のカー

ディガンを羽織った彼女は、素朴な中にも育ちの良い雰囲気を感じ出している。その表情のどこかにあどけなさを残し、それがまた彼女の雰囲気を感じさせていた。そんな彼女を愛している剣人は、素直に頭を下げてしまう。

「悪い。さつさと大希の顔を見ておきたくてさ」

「はいはい。わかりました、っと」

さくらにしても、これ以上に責める気はない。肩まで伸びた髪を背中に流すと、さつさと剣人の隣に腰かけた。

「……二人とも、元気で何より」

会った途端に痴話喧嘩を見せつけられ、大希はすっかり鳩が豆鉄砲を食らったような顔になっていた。気付いたさくらは、肩をすくめて上目遣いをする。

「ごめんね。気を使わせちゃったかな。お見舞いに来たのに。ほんとは私が言うセリフよね、それ」

戸惑いどおしの大希だったが、久宇慈高校のミスコンに推薦されたような美人に謝られては、男として許さないわけにもいかなかった。大希が引き出されるように頷いてしまうと、さくらはにっこりと笑い、手に提げていたかばんから紙皿と果物ナイフを取り出し、リングの網を開け始めた。

「待ってて。今リングむくから」

「あ、ありがとう」

大希は頬を緩め、さくらの手の内でリズムカルに動く果物ナイフを見つめはじめ。さくらはただ料理が得意なだけでなく、こうした細かい作業も上手だ。そこには彼女の気配りができる性格が現れている。美人で性格にも優れているとなれば、剣人のことを誰もが羨むのは当然だった。

「さくらさんと剣人さん、式はまだ挙げないんですか？」

カップルの隣で気恥ずかしくなったのか、未成は二人の方を見ない。改めて尋ねられて、剣人とさくらは向かい合ってみた。もうすでに、見つめあっただけでどきまぎするような初々しさはなくなり、

一緒にいて当たり前と二人は思うようになっていた。

「まあな。付き合いだして九年か。そろそろ結婚してちょうどいい頃かもな」

「私は大学を出た頃からずっと言ってるけどね。結婚しよう、しようって。結局は剣人の肚次第なんだよ」

さくらが剣人の瞳を覗き込みながら言うと、彼は苦笑いしながら頭を掻いた。

「だって、まだ十分に生活資金が貯まってなかったからさ……」

「そういう慎重なところはあなたのいいところだけど、私だって稼いでるんだから、こういう時には思いきってほしいな」

「そうか？」

しばし相思相愛のやりとりを見つめていた大希だったが、しだいにうるさく感じるようになっていた。普段は真面目でお堅いところもある二人のためか、なぜだか余計に鬱陶しかった。

「愛し合ってるのはわかったから、いい加減にしてくれよ。お前たちは俺の目の前でイチャイチャするためにここまでわざわざ来たのか？」

ようやく二人は我に返った。笑顔を引きつらせ、ぎこちない動作で大希の方に目を戻す。剣人は頬を赤らめた咳払いで大希の質問に答える。さくらは目を泳がせながら、切ったばかりのリングを差し出した。

「ごめんね。もちろんそんなつもりは無いよ……この話題は二人で家まで持ち帰るから、許して」

「ああ。勘弁してくれよ？」

大希はは眉にしわを寄せたまま、さくらが差し出した色濃く甘そうなリングに手を伸ばす。このところずっと彼女がいないものだから、二人の仲睦まじい様子を見るのは面白くなかったのだろう。嫌そうな顔を少しも崩そうとしない。剣人とさくらは困った顔で目配せするしかなかった。

そんな時に助け船を出せるのが未成なのだ。三人の顔をぐるりと見渡した彼は、柔和に微笑んだ後、リングを一つ頂戴しながらさくらに尋ねた。

「じゃあ、さくらさん達は一体何をしにここまで？」

それを聞いた途端、さくらはぱつとその顔を輝かせた。目で感謝を必死に伝えながら、さくらは上ずった声を出す。

「う、うん。そうそう！　そうよ。私達はとても心配な事があったからここまで来たの。全く、私達ったら何してんだろ」

そのわざとらしい言い回しといったら、大希はさらに視線を強めてしまったほどだ。さくらは苦笑いをひきつらせ、さすがの未成もこれを助けるのは無理だと思う。だが、歴戦の大將は小さな小さな突破口一つで勝利を得てくるのだ。

「そうだな。本当はお前に忠告をしに来たんだ。お前が思った以上に元気だったから、一瞬忘れそうだったけどさ」

「忠告？」

大希はいきなり目を鋭くした剣人に怪訝な顔をした。その目は全く心当たりが無いらしく、疑問の色が浮かんでいた。それを見て取った剣人は舌打ちをして、出し抜けに大希の左肩を掴んだ。

「いてえ！　何すんだよ！」

反射的に剣人の手を払い落とし、そのしかめっ面を睨み返す。その視線に久宇慈の大將はぴくりとも動じず、にべもなく言い放った。「その痛みを忘れんな。これ以上の無茶は絶対にするなよ。……親父みたいになるぞ」

剣人が言い放った横で、さくらも控えめに頷く。大希は目を瞬かせた。久方振りに蘇ってくる過去の記憶。心に深く刻み込まれたそれは、そして自分や剣人、そして健が警察官を目指すきっかけだった。そして、この世の理というものを付きつけられた瞬間でもあった。大希は困ったように肩をすくめ、自分の腹に巻き付いている包帯に目を向けた。

「切り替え早いな。結婚するしないの話の後で、いきなりその話を

持ち出すかよ、普通」

「これくらい切り替え早くないと、大将の仕事はやっていけないからな」

不敵に笑ってみせた剣人と、感心した笑みを浮かべた大希。その二人の間に交わされる感情のやり取りを読み取れない未成は、交互にその笑みを窺いつつ、申し訳なさそうに声をかける。

「あの……その話、詳しく聞かせてくれないですか？」

テーブルに片肘ついていたさくらが、不思議そうな顔で未成の目を窺う。

「あれ。あの時結構なニュースになってたんだけど、やっぱり転勤してきたばかりじゃわからないか」

未成は目を泳がせ、少々うろたえた様子だ。何の気なしに言ったつもりだったが、変に困らせてしまったことに気づいたさくらは慌ててとりなそうとする。

「ご、ごめん。そんなに悩まなくていいよ。話しても減るものじゃないし、今話すから。ねえ？」

さくらから送られてきた視線を受け取り、剣人は静かに頷いた。

その時、やたらと大きな音で病室の戸が開く。相部屋の人々から迷惑そうな目を一身に受けていたのは、空井健だった。一番来て欲しい人間がやってきて、大希は満足げに微笑む。

「ちょうどよかった。待つてんだ、お前のこと」

「は？ 待つてた？ 何のこと？」

スーパーで買ってきたらしい詰め合わせセットをぶら下げ、健はぽかんと口を空けた。前も後ろもわかっていない健に、さくらは指を振りながら説明した。

「今から、この来栖未成くんに私たちが共有している思い出を話してあげようと思ってるの。そこにちょうど役者が出揃ったってわけ。オッケー？」

しばらく首を傾げていた健も、大希、剣人、さくらの表情を見回

しているうちにようやく話が飲み込めた。

「ああ、あれか。そりゃあ、俺も必要だよな」

健は椅子を取り上げ剣人達とは反対の側に座った。それを確かめた大希は、首を捻って未成の目を見つめる。

「俺達が今こうして警察をやってるのは、今から話す事件がきつかけなんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9326w/>

原子番号173

2011年10月9日03時18分発行